

2019年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	育児中の看護系大学教員のワーク・ライフ・バランス ーコンフリクトとエンリッチメントに着目してー
キーワード	①ワーク・ライフ・バランス、②看護系大学教員、③育児

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	イマイ ジュンコ 今井 淳子	所属等	東京医療保健大学 立川看護学部 助教
プロフィール	創価大学工学部生物工学科卒業、一般企業勤務の後、国立看護大学校看護学部看護学科入学、看護師免許を取得。4年間の看護師経験を経て、埼玉医科大学大学院看護学研究科修士課程を修了。創価大学看護学部看護学科基礎看護学領域助手、現在の東京医療保健大学立川看護学部では看護基盤学領域で助教として勤務している。 教員としてのキャリアを積みながら2人の子どもを出産。自身の経験をもとに、育児に関連したワーク・ライフ・バランスに関する研究をテーマに取り組んでいる。		

1. 研究の概要

育児を行いながら働いている看護系大学教員が、仕事と家庭生活の両立において起こる葛藤や困難の他、両立におけるポジティブな側面にも着目し、それがどのような要因と関連しているのかを明らかにするための質問紙調査を行った。

2. 研究の動機、目的

看護系大学・学部・学科の数は、平成4年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」公布以降、急速に増加した。それに伴い、看護系大学教員の量的確保、質的担保が十分でないという事態がおこっている。看護系大学教員の場合、臨床経験を積んだ後に教員の道を歩むことが多く、若手の教員にとって、教員としてのキャリアを歩み始めて経験が浅い頃に、結婚・妊娠・出産などのライフイベントを抱えやすい年齢となる。他の学部教員とは異なり、病院や地域への実習指導、技術演習を担う時間数も多いため、勤務時間の調整に限界が生じることや実習や講義に代替教員がいないため授業に穴をあけられない状況があり、大学教員としての仕事と家庭生活との両立において葛藤や困難があることが報告されている。研究者は、既に全国の未就学児を持つ看護系大学の女性教員を対象に、仕事と家庭の両立における葛藤を表す概念であるワーク・ファミリー・コンフリクト (Work-Family Conflict: 以下コンフリクト) の尺度を用いて、コンフリクトとその関連要因を調査してきた。一方、近年は、ワーク・ライフ・バランスにおけるポジティブな関係性が着目され始め、国内でも、ワーク・ファミリー・エンリッチメント (Work-Family Enrichment: 以下エンリッチメント) 尺度日本語版が開発されたところである。ワーク・ライフ・バランスがとれているかどうかは、コンフリクトとエンリッチメントのそれぞれを、仕事から家庭へ、家庭から仕事への2つの観点から見ないと正確には把握できないといわれている。また、エンリッチメントがコンフリクトを緩衝させる効果もあることから、コンフリクトとエンリッチメントの両方の調査を行い、それぞれの関連要因を検討することで、よりワーク・ライフ・バランスが保たれるような支援体制について示唆を得られ、看護系大学の教員の確保、離職予防、若手教員のキャリアアップやライフプラン構築の資料となる可能性があると考えた。

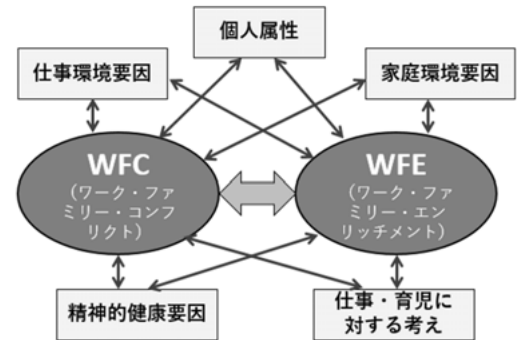
そこで、本研究は、育児中の看護系大学教員を対象に、仕事と家庭を両立する上で発生す

るネガティブな面とポジティブな面の両面を調査し、それぞれにおける関連要因を明らかにすることで、仕事と生活の全体的調和がなされるための支援方法・支援体制の見直しについての示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の結果

(1) 研究の枠組み

育児中の看護系大学教員を対象に、仕事と家庭生活の両立におけるWFC（ワーク・ファミリー・コンフリクト）とWFE（ワーク・ファミリー・エンリッチメント）を測定した。関連が考えられる要因は、2014年度に本研究者が行った研究を参考に、「個人属性」、「家庭環境要因」、「仕事環境要因」、「精神的健康要因」、「仕事・育児に対する考え」の5つの枠で構成した。



(2) データの収集・対象者

全国の看護系大学284か所に送付し、81大学の学部長・学科長より研究協力承諾書をいただき、560人の対象者より調査用紙の回答があった。調査の対象者は、未就学児または小学生の子どもをもつ看護系学部・学科に勤務している教員である。

(3) 研究の経過

本研究は、東京医療保健大学のヒトに関する研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：教31 - 47B）。

現在、回収した調査用紙よりデータを入力している段階であり、これからデータの分析を行う予定である。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の調査における自由記述欄にて、対象者の先生方から、研究の成果を学会での発表や論文で発表されるのを待っている、というメッセージを多くいただいた。育児をしながら働く教員は多くなく、あまり着目されにくい視点かもしれないが、大学教員のワーク・ライフ・バランスや、働きやすい職場改革など、多くの方が望んでいることなのかもしれないとこの調査を通して感じる事ができた。

まずは、急いでデータの分析結果を出し、学会発表や論文化を目指す。そして、大学教員を対象としたワーク・ライフ・バランスについての尺度を用いて検証した報告が少ないことから、今回の結果を踏まえて、コンフリクトを低減させる支援や、エンリッチメントを増強させる支援を提案することで、大学における男女共同参画の推進の一役を担えればと思う。

5. 社会に対するメッセージ

調査内容にも入れておりますが、私自身、育児をしながらの教育・研究活動において、どうしても比重が教育の方に傾くことが多く、研究時間の捻出に苦慮している状況です。しかし、今回いただいた研究の機会をチャンスととらえ、普段ではあきらめてしまう、研究時間の捻出にチャレンジすることができました。そして、若手・女性研究者奨励金による研究を遂行していくなかで、育児をしながら教育も研究も担い、活躍されている多くの看護教員の方々、また、看護系大学の学部長や学科長の方々より、本研究への期待と激励をいただくことができました。また、看護の分野に限らず、さまざまな分野において活躍されている若手研究者の方、女性研究者の方々と交流することができ、刺激をいただきました。この経験より、同じように育児をしながら活躍されている方々との交流の機会を設けていくことが、若手研究者や女性研究者の研究推進につながるのではないかと思いますので、その点の介入研究をしていければ、と、夢が膨らみました。

本研究の意義をご理解いただき、研究助成をご支援いただきました日本私立学校振興・共済事業団および関係各位に心より御礼申し上げます。